

スラヴ諸語におけるバター加工用語

～先史スラヴ文化における語彙の再建～

**The terms of the butter production in Slavic languages
Lexical reconstruction in prehistoric Slavic culture**

佐藤規祥

Noriyoshi Sato

Abstract

In this paper I attempt to present the linguistic approach for the development of butter production in the prehistoric Slavic culture. Slavic languages have inherited a number of synonymous lexicons with their derivatives, denoting the butter products and the churning vessel. Of them, the words denoting the salve and the grease have retained the morphologically archaic features. It suggests that these words can be traced back to the fairly early proto-Slavic source. On the other hand, it is conceived that the word for the butter, which also means the salve in archaic dialects, was presumably, formed in the later proto-Slavic period. It is, therefore, sufficiently possible that in the prehistoric Slavic culture the production of the butter was initiated originally for the purpose of medical utilization.

1. 序論

スラヴ諸語における「バター」を意味する語彙は、互いに対応する同一起源の中性名詞によって表される (例: ロシア語 масло, チェコ語 máslo, ブルガリア語 масло)。これらはいずれも疑いなく、その起源がスラヴ祖語の *maslo という語形に遡及されることを示している (*印の付した語形は慣用に従い、理論的に想定されることを示す)。言うまでもなく、この古い語彙にはスラヴ諸族が先史時代から生活基盤の一部に取り入れてきた乳文化が深く関係している。その意味でバターは牧畜社会における象徴的な産物のチーズと並ぶ重要な語彙の一つとも言える。

実際には、現代社会における日常的感覚ではチーズと比較すると、バターは単に他の食品に対して補助的な役割を果たす食品に過ぎないかもしれない。それにもかかわらず、相当古い年

代からチーズと併行してバターが加工され続けたのは、少なくとも何らかの重要な利用価値が認められていたのかもしれない。もしそうだとすれば、バターの加工には食用以外にも別の用途があったということも考えられる。そこで、本論考においては、先史時代のスラヴ文化において、バターが何を目的に加工されていたか、バターを意味しえた語彙には他にどういった語義が表されていたかについて、スラヴ諸語の語彙例の比較に基づき検討したい。

2. バターの製法とその用語

以下において言語学的な視点から論じるにあたり、民族学的な議論なくして解明できない側面もある。そのため、あらかじめバターを加工する技法についての基本的事実を確認しておきたい。

牧畜民の社会においては先史時代から多様な乳製品が伝統的に作られてきていた。ただし、その製品を加工する方法は牧畜民の居住する環境に強く影響され、同一の名称で呼ばれる製品が異なる製法で得られることも稀ではない。バターもまたこれと同じく、同一地域においてさえ決して定まった製法で加工されてきたとは限らない。そこで、はじめに統一された記述法として、学術用語の定義に従いその説明をしておく必要がある。本論考においてとくに関連する幾つかの用語の定義について、以下に記しておきたい。これは世界各地の民族間の乳加工体系を比較検討している平田の示す図表が有益であるので、これに従う(平田 2013 p.37 表 1-3)。

バター：酸乳もしくはクリームから振盪法もしくは攪拌法により主に乳脂肪を集めた乳製品。

バターオイル：バターまたはクリームから加熱により水分を主とした乳脂肪以外の成分を除いた乳製品。

バターミルク：酸乳もしくはクリームからバターを製造する際に分かれる液体部分。

酸乳：乳酸菌により醗酵させた糊状もしくは液体状の醗酵乳。保存性が十分ではない。西欧や日本ではヨーグルトと呼ぶ。

酸敗乳(自然醗酵乳)：乳酸発酵スターターを添加せず自然醗酵させた腐敗気味の醗酵乳。たいていはこのままでは食さず、加熱後にチーズにする。

クリーム：静置法もしくは遠心法により比重の違いを利用して乳から主に乳脂肪を集めた乳製品。

ホエイ：チーズを製造する際に分かれる液体部分で、主にホエイタンパク質、乳糖、無機成分を含む。

上記の定義に記されているように、バターは酸乳またはクリームから加工される場合があり、その酸乳自体が生乳から直接得たものか、あるいは過熱、静置した後のものかは問われない。そればかりか、キンステッドが主張するように、同じバターでも牛乳か羊乳かによりその製法

が異なっていたという説もみられる(キンステッド 2013 p.196)。彼の主張による限りでは、牛乳と違って羊乳はその性質上簡単にはクリームを分離しないため、羊乳からチーズを作る際にホエイを分離し、その表面からホエイクリームをすくい取り、それを攪拌することで、バターとバターミルクに分けるといふ。牛乳ならば直接、表面からクリームを成分を取り出し攪拌することができるというわけである。

さらに、上述の例とは異なる技法でバターを加工するという、重要な報告例がある。平田はブルガリア各地において乳加工体系に関する実地調査を行い、それに基づき幾つか異なる過程でバターが加工されていることを観察している。そのうちとくに重要なのは、現地で伝統的に継承されてきたと考えられる加工法の三つの系列である(平田 2013 p.309, 図 7-3)。すなわち、非加熱醗酵型系列、加熱乳酸醗酵型系列、レンネット使用型系列である。ここではその複雑で仔細な記述を簡略化し、バター加工の部分だけに焦点を当て示すと以下の通りである。

非加熱醗酵型系列

生乳を静置し、自然醗酵型酸乳にする。これに湯を加えてからチャーニング(攪拌)することで、バターとバターミルクに分離する。このバターを加熱してバターオイルにする。バターミルクの方は加熱してチーズとホエイに分離する。このチーズからさらに加塩したチーズを得る。

加熱乳酸醗酵型系列

加熱凝固した生乳を静置して冷却し、前回に得た酸乳を少量加えかき混ぜる。こうして静置した酸乳の表面からクリームを除去したあと、チャーニングすることでバターとバターミルクを得る。このバターミルクはさらに加熱することによってチーズとホエイに分離する。

レンネット使用型系列

生乳をまずレンネットを添加して凝固する。この凝乳を静置したあとチャーニングすることでバターとバターミルクを得る。このバターミルクはさらに加温することによってチーズとホエイに分離する。

上記の通り、どの系列もバター自体を得るためというよりは、チーズ加工する過程の副産物のようにも思われなくもない。その意味では、バターはチーズを加工する技法の発達と密接に関連していると言うことができよう。ただ、これらの加工の技法だけを見て、バターとチーズの何れが先行して発達したかを推定することは難しい。

3. バター加工の起源

バター加工の技法が歴史的に先行したことの論拠になり得るのは、とくにレンネット使用型系列の解釈にある。というのは、レンネット使用型系列ではレンネットで凝固することにより

直ちにチーズを加工する方法があるにもかかわらず、まずバターを先に分離し、残ったバターミルクからチーズを加工するからである。

ついでながら、西部の平地農業地帯では酸乳ではなく、生乳をそのまま静置させて乳酸醗酵した酸敗乳をチャーニングしてバターを加工する方が主流であるという観察結果を報告している(平田 2013)。こういった製法の違いは生産地域の環境に強く依存しているようである。その事実もまた、バター加工の技法の歴史的発達について論じるうえで重要な論点になりえる。

平田の主張によると、今日一般に行われているレンネットを利用したチーズ加工は、当初は生乳の凝固、更にはバター加工を目的とした可能性があるという。すなわち、ブルガリアにおいて観察されるバター加工に利用されるレンネット技術が転用されて、チーズ加工が発生したと指摘している(平田 2013 p.325)。この説は専ら戦後のブルガリアにおける実地調査に基づくものであるので、今後さらに広範な地域における調査の実施と、歴史的な経緯も視野に入れた議論も必要になるであろう。

それにしても、かりにも食糧として重要な蛋白源になり、保存性も期待されるチーズの加工よりも先行して、食糧としての利点が軽微で脂質を主成分とするバターへの加工が行われたのだとすれば、それは一体どのように説明されるであろうか。その解明には様々な部門からの議論が今後、要請されるであろう。この論点について比較言語学の視点から決定的な論拠を提示することは難しいけれども、諸言語間における関連する語彙の対応に基づき、その相対的な年代の位置づけを求める方法により議論を推進することができるかもしれない。ここでは、そのための言語学的な視点からの検討材料のみを提示したい。

4. バター加工用語

先史時代から牧畜民として生活していたインド・ヨーロッパ語族は、その使用した言語に牧畜文化に欠かせない語彙群を発達させていた。実際、インド・ヨーロッパ諸語にはバターやバターミルクなどを意味する幾つかの語彙に対応する実例があることから、それらの語彙が共通の祖語の時代に由来することが想定される。その一方で、どういふ分けかチーズに類した加工品を意味する語彙の対応例は全体的に観察されず、むしろ個別かまたは地域的に限定して発達した可能性を暗示している(Mallory/Adams 1997 p.382)。この言語学的事実は単なる偶然とはいえないけれども、それ自体だけではどういった文化的背景を示唆しているか解釈しにくい。そこで、前述の平田説にこの言語学的事実と関連させて考察することは意義深いであろう。

ヨーロッパにおけるチーズ加工の技法は生産される地域環境の影響を受け、多様な系列が発達してきた。多彩なチーズ加工についての学問的記述が知られている反面、ヨーロッパにおけるバターの加工技法の種類について私自身は確認することができていない。上述の通り、ブルガリアにおいてはバター製法に3系列の違いがあるものの、その相違は少なくともブルガリア語の語彙には反映されていない。そのうえバターの製法の諸系列が他のスラヴ語圏においてどのような実態であるのか、今のところ不明である。そこで、まずスラヴ諸語とくにそれらの方

言におけるバターを示す語彙の多様性について確認したいと思う。

本論考においては、バター加工に不可欠な作業とそれに利用される用具類などの関連する語彙類をかりに「バター加工用語」と名付ける。

バターが何の目的で加工されたかという問題に光を当てる方法の一つとして、まずバターを意味する語彙の語源的解釈をすることが求められ、次いでその類義語の原義を検討することが考えられる。これは類義語の語義のうち、バターをも同時に意味しえる多義語の実例に基づき、その他の語義を確認するという手順で推論される。この手順からは、バター自体が何の用途に利用されたのかという問題は別にして、そもそも原料、素材は問わず用途、利用目的が何であったのかを推論することを意味する。すなわち、バターが何か別の物の代用であった可能性も含め、その検討対象を広げることができる。

5. 語彙の比較

「バター加工用語」に関係付けられる主たる語彙には次の例が挙げられる。すなわち、「バター」、「バターオイル」、「バターミルク」、「塗り薬、軟膏」「攪乳桶」「(バターを) 攪拌する」「攪乳棒、攪乳杵」などである。ただし、これらの意味を表す語彙はスラヴ諸語において必ずしも一律に使用されるわけではない。同一の語彙が言語間や方言間で異なる意味を表し、しかも互いに異なる語彙間で語義が重なり合う。そのため、個々の語彙がかつて意味していた原義を祖語に想定することは一層難しくなる。後で例示するように派生された語形自体もまた、非常に多様性に富んでいることから、単一の方言内においてあらゆる語形が使用されていたとは考えにくい。おそらく個々の方言においては本来、決まった語形と語義が使用されていたのであろう。そのため、ここではそれらの個々の事例につき、あえて原義を想定することは避けたい。

個別の事例についてはスラヴ祖語の語形を見出しに示し、そこから発達した同一語形の語彙を諸言語間で対照し、それぞれの語形の語義について比較検討したい。なお、煩瑣を避けるため、二次的に派生した名詞の指小形、形容詞や動詞などは省略する。

以下に示す通り、大部分の語彙 (1~13) は動詞の *mazati 「塗る、塗布する」から派生した名詞である。また、これとは別に動詞 *mq̄titi 「攪拌してバターにする、攪乳する」の語幹 *mq̄t- からもわずかに派生した名詞がある。これらのうち前者の動詞についてはその語幹 *maz- から直接かまたはその語形変化形の分詞語幹 *mazt- から派生した名詞のタイプと、同じくその動詞の語根 *maz- に接尾辞 *-sl を付加して派生した名詞のタイプに二分される。これらの動詞から生じた名詞の派生関係をさらに詳しく説明することは、比較的容易である。

通常はバターを意味する名詞は、祖語の語形 *maslo と関係づけられる。この名詞にさらに二次的に接尾辞 -n を付加することで、「攪乳桶」または「バター容器」、さらに「攪乳棒」などを意味する名詞が派生したことがわかる。以下に例示する語彙がその代表例である。実際の方言形式はこれらよりさらに多様性に富んでいるが、ここではその音声形態上の変異に意味

がないので、実例の網羅は避ける。ただし、語義の相違が見られる実例には着目したい。

*masl- 語幹の名詞

1. *maslo : 古チェコ語 *máslo*「(牛乳の)バター」, チェコ語方言 (Morava: Bartoš 1905, p.193) *máslo* 「バター, 無醗酵バター, 非加熱バター」, (Mistřice : Malina 1946 p.56) *máslo* 「バターオイル」, 古ポーランド語 *maslo* 「バター」, ポーランド語 *masło* 「牛乳のクリームから得たバター」, スロヴァキア語 *maslo* 「バター」, 古教会スラヴ語 *масло* 「オリーブ油, 聖膏, 牛乳のバター」, ブルガリア語 *масло* 「バター, 植物油, 潤滑油」, セルビア・クロアチア語 *масло* 「バター, バターオイル, 植物油, 聖油」, スロヴェニア語 *maslo* 「バター」, 古ロシア語 (11~17世紀) *масло* 「オリーブ油, バター, 聖油, 軟膏, 油絵具」, ロシア語方言 *масло* 「バター加工で生じる乳漿, バターオイル」, ウクライナ語 *масло* 「(牛乳の)バター, (正教の祈祷用の)聖膏, 潤滑油」.
2. *maslica : チェコ語方言 (Ostravsko : Bartoš 1905, p.193) *maslica* 「攪乳桶の攪乳棒」.
3. *masljana : ロシア語方言 *масляна* 「攪乳桶」.
4. *maslěňka : チェコ語方言 (Slavkov, Bučovice : Gregor 1959 p.93 ; Haná, Dolsko : Bartoš 1905, p.193) *maslinka* 「攪乳桶」, (Břeclav : Svěrák 1966 p.129 ; Mistřice : Malina 1946 p.56) *maslénka* 「攪乳桶」, 古ポーランド語 *maślanka* 「バターを叩いた後にクリームから残った液体, バターミルク」, ポーランド語 *maślanka* 「バターミルク」, ブルガリア語方言 (Ольшан : Бунина 1954 p.33) *маслянка* 「攪乳桶」, (Суворово : Полтораднева-Зеленина 1954 p.97) *масл'анка* 「バター容器」, 古ロシア語 (11~17世紀) *маслянка* 「バターミルク」, ウクライナ語 *маслянка* 「バターを分離した後に残った乳漿, バターミルク, バター容器」, ウクライナ語方言 (Тернополь : Караś p.64) *масл'анка* 「バター容器, 攪乳桶」.
5. *masłńica : チェコ語方言 (Opava : Lamprecht 1963 p.74) *masňica* 「バター攪拌桶」, カシューブ語 *maselńica* 「バター容器」, ポーランド語方言 *maślńica* 「バターの保存用器」 (Karłowicz 1903), ポーランド語 *maślńica* 「攪乳桶」, セルビア・クロアチア語 *масленица* 「粘土製バター壺」, ロシア語方言 *масленица* 「バター容器」, ウクライナ語方言 (Тернополь : Караś 1975 p.64) *масниця* 「バター容器, バター攪拌桶」.
6. *masłńička : ポーランド語 *maślńiczka* 「攪乳桶」, ウクライナ語 *масничка* 「バター容器, 攪乳桶」, ウクライナ語方言 (Тернополь : Караś 1975 p.64) *масничка* 「バター容器, 攪乳桶」.

上記の実例は個々の方言において異なる体系に基づき、それぞれの語彙とその語義が結びついて区別されている。従って、比較の方法に基づき、祖語における個々の語彙にその原義を想定することは成し遂げられそうにない。だからと言って「バター容器」「攪乳棒」「攪乳桶」とが全く区別されずに、同一の語彙が多義語として使用されていたとは全く考えられない。少なくともこれらの語彙は祖語において厳密に区別されていたに違いない。

現ウクライナ領のドニエストル上流域 (Stryj, Skole, Turka, Sambor 周辺) には、ポーランド語

のボイコフ方言が分布する。その方言地図によると、「攪乳桶」を表す語彙は 18 例も観察されているが、その多くは同一形式の音声変異形であるか、またはスラヴ諸語に特有の指小辞の変異形によって区別されているに過ぎない (Riegera 1980 26 図)。同様に、ウクライナ語の隣接する方言 (Тернополь, Львів, Ивано-франківск 周辺) においても「攪乳桶」を表す語彙 масниця の変異形が 17 例も観察される (Karaš 1975 p.64)。さらに、「攪乳棒」を表す語彙はこれをはるかに超過する例が観察されている (同 p.65)。これに類した現象はすでに祖語時代から生じ、発達していたと考えられる。ただし、これと並行した現象は以下の他の語彙例には、観察されないという点にも注意すべきである。

何よりも注目すべき例は言うまでもなく、*maslo に想定されえる原義が単なる「バター」であったとは断定できない点にある。その幅広い多義性は果たして歴史的に発達した結果としてもたらされたものなのか、それとも祖語における当初から含意していたのか、語彙の比較に基づくだけでは説明できそうにない。なかでも「バター」と「バターオイル」の区別が少なくとも、語彙的に明示されていない。これは本質的には区別することに意義がなかったことを暗示しているようにも思われる。しかしながら、バターオイル自体を意味する事例は、そもそもバターではなくバターオイルを最終生産物として得ることが目的であった可能性を裏付けている。

他方で、「軟膏」の意味では以下に示す他のいくつかの語彙との同義語にもなっている。これは生乳から加工されたバターを原料にしたことを含意する軟膏 (*maslo) であるか、必ずしもそのことを明示しない、他の原料から加工されたことも暗示する軟膏であるかという相違によるものと考えられる。この語彙表現の区別にはまた別の意味も見て取れる。軟膏が何を原料として精製されたものか明示できない語彙とは対照的に、*maslo だけは常に動物性の乳を利用したバターであり、それが日常的に果たす役割の高さを示しているようでもある。

*maz- 語幹の名詞

次に、動詞語幹 *maz- から派生した名詞の例を見てみたい。それらのうち、とくに古風な語形に特徴付けられるのは、語幹を拡張せずに名詞化した例 (*mazь) と分詞語幹から名詞化した例 (*mazьь) である。それ以外の語彙も非常に古風な接尾辞を伴う名詞である。いずれの例も祖語の最古層の時代に生じた語彙の可能性がある。その意味では、上掲の語彙が *masl- (< *maz-sl-) という語幹から派生した名詞 (1, 2) とさらにその二次的な派生語 (3~6) であり、相対的に後代の語彙であることを示すのと対照的である。かなり古風な接頭辞が付加された例 12. *ob-mazta と複合語 13. *kolo-mazь も観察される。

7. *mazadlo : チェコ語 (Jungmann 1990) mazadlo 「軟膏, 靴墨」, スロヴァキア語 mazadlo 「潤滑油」.
8. *mazidlo : チェコ語方言 (Morava: Bartoš 1905, p.195; 1895, p.340) mazidlo 「靴墨」, ブルガリア語 мазило 「(皮革用)クリーム」, マケドニア語 (Толовски / Иллич-Свитыч 1963) мазило 「潤

- 滑油」,セルビア・クロアチア語 *мазило*「潤滑油, 化粧クリーム」,ロシア語方言 *мазило*「顔に塗るクリーム」,ウクライナ語 *мазило*「潤滑油」.
9. **mazivo*: スロヴァキア語 *mazivo*「潤滑油」,マケドニア語 (Толовски / Иллич-Свитыч 1963) *мазиво*「潤滑油」,ロシア語方言 *мазива*「軟膏」.
10. **mazť*: 古チェコ語 (Gebauer 1970) *maft na hlavě*「頭に塗る軟膏」, *maft na rány*「傷に塗る軟膏」,チェコ語 (Kott 1896; Jungmann 1990) *mašť*「バターオイル, 塗り薬, 軟膏」, *mast na hlavu*「頭に塗る軟膏」,古ポーランド語 *maść*「軟膏, 塗り薬, 化粧クリーム, 色彩」,ポーランド語方言 (Karłowicz) *maść*「獣の毛色」,ポーランド語 *maść*「軟膏」,カシューブ語 *masc*「軟膏」,スロヴァキア語 *mast'*「獣脂, 軟膏」,教会スラヴ語 *масть*「聖膏, 脂濃い食材, 色」,ブルガリア語 *маст*「獣脂」,マケドニア語 (Толовски / Иллич-Свитыч 1963) *маст*「獣脂」,セルビア・クロアチア語 *маст*「獣脂, 加熱したラード, 顔色」,スロヴェニア語 *mast*「獣脂」,古ロシア語 (11~17世紀) *масть*「聖膏, 聖油, 脂肪分, 肥沃, 色, 絵具, 軟膏, 潤滑油, 車軸油」,ロシア語方言 *масть*「軟膏」,ウクライナ語 *масть*「軟膏, 獣の毛色」,ウクライナ語方言 (Тернополь: Karaś p.62) *масть*「軟膏」.
11. **mazь*: チェコ語方言 (Slavkov, Vučovice: Gregor 1959 p.94) *maz*「糊, 粘性の物」,古ポーランド語 *maź*「車軸油, タール」,ポーランド語 *maź*「潤滑油, 車軸油」,スロヴァキア語 *maz*「粘液, 糊」,古ロシア語 (11~17世紀) *мазь*「軟膏, 潤滑油, 靴墨, 車軸油」,ロシア語方言 *мазь*「食用に不適な獣脂」,ウクライナ語 *мазь*「軟膏, 潤滑油」.
12. **obmazta*: チェコ語方言 (Opava: Lamprecht 1963, p.90; Frenštátsko: Horečka 1941 p.124) *omasta*「バター, ラード」,(Morava: Bartoš 1895, p.355; Jungmann 1990) *omasta*「ライ麦殻, 家畜の飲料に混ぜる小麦殻」,ポーランド語方言 *omasta*「脂質調味料」,スロヴァキア語 *omasta*「脂肪」,ウクライナ語 *омаста*「脂肪」.
13. **kolomazь*: 古チェコ語 (Gebauer 1970) *kolomaz, -i* (= *kolomast*)「車軸油」,チェコ語 (Kott 1896; Jungmann 1990) *kolomaz*「車軸油」,チェコ語方言 (Mistřice: Malina 1946 p.45) *kojomas, -ze*「車軸油」,古ポーランド語 (16世紀: Borecki 1976) *Wozowa maź kołomaź. Smoła / albo ynfza tłułość*「荷車の油 車軸油. 樹脂または他の脂」,ポーランド語方言 (Karłowicz 1903) *kołomaź*「車軸油」,セルビア・クロアチア語 *kolomaz*「車軸油」,スロヴェニア語 *kolomaz*「車軸油」,ロシア語方言 *коломазь*「車軸油」,ウクライナ語 *коломазь*「樹脂の車軸油」(**kolo* は「車輪」を意味する名詞).

上掲の語彙例もまた、個別に祖語の原義を厳密に想定することは容易でない。とは言え、これらの語彙が必ずしもそれぞれ異なる語義を表していたとは限らない。それらの多義性は当初から備えていた可能性がある。そればかりか、「車軸油」や「潤滑油」「靴墨」のようにそれぞれの意味の違いが別の実体を指示していたとも限らない。同一の原料で加工された油脂が用途ごとに割り当てられていたに過ぎなかったことも想定されえる。ただし、「獣脂」「バター」

「樹脂」などのように多種の原料が利用されていたことも事実と言える。「軟膏」と「潤滑油」を意味する語彙が顕著であることは興味深い。古くから様々な用途に適応した軟膏が製法に改良が加えられて精製されていたのかもしれない。

トゥルバチョフ編纂の『スラヴ諸語語源辞典』によれば、*maslo, *mazь, *mazьtь は当初「(体や頭髮を) 塗るもの」を意味する同義語であったが、*maslo がとくに「植物油, 牛乳のバター」のみを意味するようになったと説明する(Трубачев 1983 p.232)。その後、「オリーブ油」を意味する借用語 *ољь entered ことで「牛乳のバター」のみを意味するようになったと主張している。さらに続けて、聖膏を塗るキリスト教の儀礼は、偶像や神聖な対象に授乳するという異教の伝統に由来すると解釈している。

*mqt- 語幹の動詞と名詞

動詞 *mqtiti から派生した語彙は比較的少数であり、スラヴ諸語全般に定着していない。とくに南スラヴ諸語に多く現れ、語義の発達は限定的である。それに対して、東スラヴ諸語には稀で、その語義が変化している。むしろ、「バターを攪拌する」という動詞の意味から派生した名詞「攪乳桶」や「攪乳棒」「(攪乳してできた) バターミルク」などのように、動詞の語義を明確に反映している。さらに、それらの名詞の接尾辞の多くはスラヴ祖語における比較的新しい特徴を示している。しかしながら、この動詞自体はかなり古く、他の印欧諸語にも対応例が現れる。

14. *mqtiti : チェコ語方言 (Valašsko : Bartoš 1905, p.210; Uherskoslovensko : Bartoš 1895, p.232) mútit' 「バターを攪拌する」, mútění ml'ěko 「バターミルク」, スロヴァキア語 mútit' 「クリームを攪拌してバターにする, 攪乳する」, マケドニア語 (Толовски / Иллич-Свитыч 1963) мати 「バターを攪拌する」.
15. *mqtъnica : ブルガリア語 мътеница 「バターミルク, 酸乳に水を混ぜた飲料」, ブルガリア語方言 (Ихтиман : Младенов 1967 p.103 ; Смолско, Пирдопско : Кънчев 1968 p.117) матеница, (Еленски край : Петков 1974) мът'ениць 「バターを攪拌した後に残った乳, バターミルク」.
16. *mqtъвка : 古ポーランド語 mątewka 「攪乳棒」, ポーランド語 mątewka 「攪乳棒」, ロシア語方言 мутовка 「練り粉を捏ねる容器」.
17. *mqtъvьnica ~ *mqtъvьnikъ : チェコ語 (Kott 1896, Jungmann 1990) mútovník, mútoveň 「攪乳桶」, スロヴァキア語 mútovnica 「攪乳桶」.
18. *mqtу, -ъve : チェコ語 (Jungmann 1990) moutev 「杵, 突き棒, 攪乳棒」.

上掲の語彙から明らかかなように、この場合の動詞 *mqtiti 「攪拌する」から派生した名詞は「バターミルク」の方であり、決して同時に加工される「バター」を意味しない。そればかりか、スラヴ諸語においてはバターミルクを意味する語彙があまり一般的でない。バターまたは

バターオイルを意味する語彙が発達しているのに比して対照的である。この事実はバターミルクを得るために酸乳を攪拌しているのではないことを暗示しているように思われる。事実、ブルガリアではバターミルクは半加工品であり、さらにそれを加熱することでカッテージチーズ(извара)に加工される(平田 2013 p.314)。

また、動詞 *mōtiti の語幹から派生した名詞 18. *mōty 「攪乳棒」の語形はかなり古風であり、先の 2. *maslica, 4. *maslěnska よりもはるかに古い語彙であるのは間違いない。

ここで問題なのは、同義語(16. 「攪乳棒」, 17. 「攪乳桶」)が上掲の別の語幹(*masl-)から派生した語彙(2. 「攪乳棒」, 3~6. 「攪乳桶」)と重なることである。語彙の相違が意味する道具の相違と相関性があるのか、実地での調査が求められよう。このような数多くの同義語が発生した背景は、それが意味する事物の歴史的変化、発達に適合して語彙表現が改新されたことによって説明することができよう。もしそれが事実ならば、おそらく攪乳用の道具の形態または素材などの違い、または加工技法自体の相違が語彙表現に反映していると想定される。その説明はバター加工の歴史的発達を理解するうえで重要な意味があると思われる。

バターを意味する名詞 *maslo ととくに関連深い語彙が「軟膏」などを意味する *mazь である。同一の動詞から派生した「塗るもの」という意味の名詞である事実から、バターが食用である以前に薬用であったという可能性は否定できない。次に、中世チェコ史料において軟膏の記録されている箇所を見てみたい。

6. 中世史料における軟膏の記録

以下では、古チェコ語と古ロシア語で記された作品中に検出された幾つかの用例を抜粋する。語彙例はいずれもチェコ語の mast 「軟膏, 膏薬, 塗り薬」と古ロシア語の масть 「軟膏」が使用されている箇所である。文字表記は可能な限り原書に従い、技術上の理由からやむなく改変した文字はあるものの、とくに音声表記を損なうものではない。

『薬師 (Mastičkář)』は 14 世紀後期に成立した、作者不詳の復活祭劇用の比較的短い韻文作品であり、二つの断片が残存する (Gebaer 1880; Hrabák 1950)。抜粋箇所はその 316 行目と 348 行目である。

- | | |
|--|------------------------|
| (316) Mazy fwymy mařtmy hlawu, | 自分の頭に軟膏を塗り |
| (347) Czynyl fem tuto mařt z myrry a řtymyana; | 没薬やタイムから作ったこの軟膏をつけたのです |

この用例は当時、チェコでは頭に軟膏を塗っていた事実を証している。また、多種の芳香のある軟膏が精製されていたことも窺える。

次は、15 世紀に中期高地ドイツ語から翻訳された、作者不詳の『トリスタン叙事詩 (Tristan-Epos)』である。これは古チェコ語で著された作品としては稀有で長大な韻文詩であ

る(Bamborschke 1968)。この作品はよく知られた『トリスタン』または『トリスタンとイゾルデ』のチェコ語版である。その内容自体は当時のチェコにおける生活の実態がそのまま反映されているとは断定できないが、自然に理解できるよう工夫されていたはずである。そこから以下の二か所を抜粋する。

(B 164v 7298 ~ 7301)

Tedt' jest drahú mast poslala,	今や(彼女は)高価な軟膏を送った
aby se jí Tvá Milost zmazala.	汝の慈悲が塗布されるようにと。
Jakž se Tristram tú mastí léčí,	トリストラムがその軟膏で治癒するよう

(B 188v 8405 ~ 8406)

ten na smrtedlné postelí ležieše,	彼は臨終の床に臥して
a nižádná mast neby jemu platna ;	如何なる軟膏も彼には利かない

上記の用例からは mast 「軟膏」がとりわけ高価な薬として重宝され、当時としてはこれに代わる他の術がない以上、重い病に際しても調合された軟膏の塗布で治癒することが期待されていたと分かる。少なくともこれだけでは「軟膏」に調合された成分までは不明である。土着の異教的な文化から発生した当時の軟膏が乳製品を主成分にしたか否かは不明である。

次に、11~17世紀に古ロシア語で記された史料をもとに編纂されたロシア語辞典を参考にし、その実例を抜粋する。

масть 「軟膏, 塗り薬」の意味で。

И повелѣ же князь велики прикладывати масть къ болячке. (Новг. IV лет., 554).

偉大なる公は軟膏を腫物につけるようにと命じた。

Оленья сала, медвежа сала. борсукова сала. мышья сала _ тое все к мастям добро. (Леч. IV, 99. XVII в. ~ XV в.).

シカ脂、クマ脂、アナグマ脂、ネズミ脂といったものはみな軟膏にするのに良い。

軟膏というものが何を原料にして精製されていたのか不明であるが、後の実例からはその原料に様々な野生動物の脂肪が利用されていたことがわかる。

いずれの用例からも、中世においては一般的な治療法の一つとして軟膏がかなり重要な役割を果たしていたことがわかる。語彙の古さを考慮に入れると、古代から連綿と軟膏は利用されてきたと考えて良いのではなかろうか。その原料としてバターが重視されてきたということは十分に考えられる。

7. 考察

語義の一つに「軟膏」を意味していたと想定される語彙 *mazъ が古風な形態を示していることから、スラヴ文化において軟膏が相当古くから精製されてきたと考えられる。それが必ずしもバターそのものであったとは断定できないが、バター加工の開始と定着に重要な意義を持っていた可能性はある。この語彙に対して、「潤滑油」を意味していたと想定される語彙 *mazъ も同様に古風な形態であり、*mazъ と区別されていたのは疑いない。潤滑油は獣脂やタールなどバターとは異なる原料で加工されていたのであれば、当初から語彙の区別があったのは必然である。また、主として「バター」を意味する語彙 *maslo が後続して発達するまでは、*mazъ が「バター」を意味する唯一の語彙であったはずである。従って、*maslo という語彙が新たに生じた背景には、軟膏とは異なる用途を表す語義が必要になった事実によって説明されよう。これは、同一の素材であるバターをその用途に基づいて区別する目的で、語彙的に表したのであろうと解釈される。それ故に、現代に至るまで素材として事実上のバターを示すこともあれば、用途として軟膏を意味する事例も並行して保持されたのではないかと考えられる。

そこで、ブルガリアにおける事例に見られるように、バターの加工に複数の系列が存在することは、どのように説明されるであろうか。バターが食用以外にも加工されていたとするなら、その用途により異なる加工法が発達したということも考えられる。しかしながら、それを実証するには今後また別の議論が求められよう。

8. 結語

先史時代のスラヴ文化においては、早くからバター加工が行われていたのは間違いないであろう。また、バターが中世においても軟膏として利用されていたことも十分に考えられる。だからといって、軟膏が必ずしもバターからのみ精製されていたとは断言できない。

攪乳桶を意味する語彙に多様性が見られるが、この語彙論的な事実がどのように攪乳の技法と関連していたのか疑問が残る。バター加工の発達チーズ加工の歴史とも密接に関連している。言語学的にこの乳加工法の発達をどの程度解明することができるか、今後の課題として残したい。

参考文献

- Borecki, Marian (red.). 1976: *Słownik języka polszczyzny 16 wieku*, t.10. Zakład Narodowy im. Ossolińskich. Wrocław.
- Bamborschke, Ulrich. 1968: *Das alttschechische Tristan-Epos*. T.2 Texte. Kommission bei O. Harrassowitz, Wiesbaden.

- Bartoš, František. 1886: *Dialektologie moravská*, první díl, Nářečí slovenské, dolské, valašské a lašské, Matice Maravské, Brno.
- Bartoš, František. 1895: *Dialektologie moravská*, druhý díl, Nářečí hanácké a české, Brno.
- Bartoš, František. 1905: *Dialektický slovník moravský*, část 1, Praha.
- Gebauer, Jan. 1880: „Staročeský „Mastičkář“ a páně A. Šemberovy námitky proti jeho přesnosti“ *Listy Filologické*, s.90-121.
- Gebauer, Jan. 1970: *Slovník staročeský*, díl 2. Academia. Praha.
- Gregor, Alois 1959: *Slovník nářečí slavkovsko-bučovického*. Státní pedagogické nakladatelství, Praha, Brno.
- Horečka, František. 1941: *Nářečí na Frenštátsku*.
- Hrabák, Josef. 1950: *Staročeské drama*, Československý spisovatel. Praha, s. 15-35.
- Hruška, Jan František 1907: *Dialektický slovník chožský*. Praha.
- Jungmann, Josef. 1990 (1836 年の復刻版) : *Slovník česko-německý*, díl 2. Praha.
- Karaś, Mieczysław. 1975: *Studia nad dialektologią ukraińską i polską*. Nakład universitetu jagiellońskiego. Kraków.
- Karłowicz, Jan. 1903: *Słownik gwar polskich*, tom 3. Nakład akademii umiejętności. Kraków.
- Kott, František. 1896-1897: *Příspěvky k českomoravskému slovníku zvláště grammaticko-frazeologickém*. Praha.
- Lamprecht, Arnošt.1963: *Slovník středoopavského nářečí*. Kajské nakladatelství. Ostrava.
- Malina, Ignát. 1946: *Slovník nářečí mistříckého*. Česká akademie věd a umění. Praha.
- Mallory, J. P., D. Q. Adams. 1997: *Encyclopedia of Indo-European culture*. Fitzroy Dearborn Publishers. London.
- Polska akademie nauk. 1963: *Słownik języka polskiego*, t.4. Państwowe wydawnictwo naukowe. Warszawa.
- Riegera, Janusza. 1980: *Atlas gwar bojkowskich*, tom 1. Wydawnictwo Polskiej akademii nauk. Wrocław – Warszawa – Kraków – Gdańsk.
- Svěrák, František. 1966: *Nářečí na Břeclavsku a v dolním Pomoraví*. Universita J. E. Purkyně. Brno.
- Sychta, Bernard. 1976: *Słownik gwar kaszubskich na tle kultury ludowej*, t.7. Wydawnictwo Polskiej akademii nauk. Wrocław – Warszawa – Kraków.
- Slovník staropolski*, t.3-4, 1961-1964: Wydawnictwo polskiej akademie nauk. Wrocław – Warszawa – Kraków.
- Академия Наук СССР Институт русского языка (ред. Р. И. Аванесов). 1991: *Словарь древнерусского языка (XI-XIV вв.)*, т.4. Русский язык. Москва.
- Академия Наук СССР Институт русского языка. 1982: *Словарь русского языка XI-XVII вв.*,

т.9. Наука. Москва.

Бернштейн, С.Б. 1975: *Болгарско-русский словарь*. Русский язык. Москва.

Бунина, И. К. 1954: Словарь говора ольшанских болгар: *Статьи и материалы по болгарской диалектологии СССР*, вып.5. Издательство академии наук СССР. Москва, с.2-63.

Гринченко, Борис, Д. 1958-1959: *Словарь украинского языка*, т.3-4. Видавництво Академії наук української РСР. Київ.

Димитровски, Тодор., Благоја Корубин, Трајко Стаматоски. 1961: *Речник на македонскиот јазик со српскохрватски толковања*. Скопје.

Кънчев, Иван. 1968: Говорът на село Смолско, Пирдопско: *Българска диалектология*, кн.4. София, с.5-160.

Младенов, Максим Сл. 1967: Лексиката на ихтиманския говор. *Българска диалектология*, кн.3. София, с.3-198.

Петков, Петко Ив. 1974: Еленски речник: *Българска диалектология проучвания и материали*, книга 7. Българската академия на науките. София, с.3-176.

Полтораднева-Зеленина, Э. И. 1954: Словарь говора болгарского села Суворово одесской области СССР: *Статьи и материалы по болгарской диалектологии СССР*, вып.5. Издательство академии наук СССР. Москва, с.64-134.

Ралев, Лико. 1977: Говорът на село войнягово, карловско: *Българска диалектология проучвания и материали*, кн. 8. Българската академия на науките. София, с.3-199.

Словарь русских народных говоров, т.14~19. 1978~1983. Москва.

Срезневский, И.И. 1989: *Словарь древнерусского языка*. Книга. Москва.

Толовски, Диме., Владислав Маркович Иллич-Свитыч. 1963: *Македонско-русский словарь*. Государственное издательство иностранных и национальных словарей. Москва.

Трубачев, О. Н. (ред.). 1990~1994: *Этимологический словарь славянских языков*, т.17~20. Наука. Москва.

Шклифов, Благой. 1977: Речник на костурсия говор: *Българска диалектология проучвания и материали*, кн. 8. Българската академия на науките. София, с.201-327.

ポール・キンステッド 2013 『チーズと文明』 築地書館

平田昌弘 2013 『ユーラシア乳文化論』 岩波書店